

# 待兼山俳句会

第六百八十五回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子  
東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

令和六年三月十八日（月）

会場 大阪俱樂部 会議室 締切 午後二時

出席者

瀬戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠  
向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者

植田真理・碓井遊子・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄  
根来眞知子・東中 乱・東野太美子・平井瑛三  
出席者十名＋投句者十一名 計二十一名

兼題

暖か・剪定（幹三） 春の闇・目刺（暁子）  
当季雑詠 通じて八句

次回

例会 令和六年四月十五日（第三月曜日） 会場 大阪俱樂部 会議室 締切 午後二時  
兼題 花曇・蛇（幹三） 春の海・雪柳（暁子） その他当季雑詠

選者吟

給食の大鍋干され暖かし

幹三

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

あほやなあしやあないなあと暖かし

春の闇前ゆく人を吸ひ込めり

暁子

やはらかきものを踏みたる春の闇

藁抜けば目刺の眼闇の穴

### 幹三選

春の闇小さく手を振り別れきし

◎地面にも枝にも白き白椿

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

春の闇太宰をりさう情人と

剪定枝活けて膨らむ蕾かな

春の闇呼びとめられて身の竦む

暖かや今日の一会を拾ふ旅

暖かやみどり児抱きて親となる

炙られし目刺ダンスのごとく反る

朧月光たたえし銀の髪

目刺焼くうつろな眼一列に

◎やはらかきものを踏みたる春の闇

春の闇もののけたちの足音す

◎春の闇前ゆく人を吸ひ込めり

剪定の鋏の音や日は高し

原種なれば花まろきままチューリップ

◎剪定の刃の光るあり垣の内

◎白壁に我が影法師暖かし

春闇に我も溶け行く雨の夜

輝子

茉衣

乱

乱

堯子

輝子

兵十郎

輝子

真理

真理

輝子

暁子

真理

暁子

真理

兵十郎

兵十郎

安廣

安廣

春の闇知人同士の声過ぐる

◎剪定の切り口白く尖りたり

春の闇雨降る夜はなほ深し

目刺買ふ海辺の神社参りし日

どこまでも歩いて行きたい暖かさ

暖かき土手に寝転び手を翳す

春の闇障子開ければ芳しき

◎春の闇犬の首輪の光りけり

田起こしをじっと見ている鴉かな

春の闇の静謐にいて充ちたりぬ

芳しき香に足止める春の闇

蔵跡のカフェーに残る春の闇

藁抜けば目刺の眼闇の穴

邦夫

安廣

安廣

茉衣

朱美

邦夫

堯子

遊子

堯子

翠

恵子

兵十郎

暁子

### 幹三 特選句講評

・地面にも枝にも白き白椿

茉衣

薄暮の時間でしょうか、それとも、暗い森を背景にした椿の樹でしょうか。落ち椿と咲く椿を一つの景と見たところがいいですね。

・やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子

うるんでいるような、情感のある闇であり、そこには妖艶さもあります。作者はいったい何を踏んだのでしょうか？そういった謎も含めて「春の闇」です。

・春の闇前ゆく人を吸ひ込めり

暁子

夜。人が見えなくなったというだけのこと。それがふつと吸い込まれたように思えた、ということです。妖しい闇の感じがよく分かります。

・剪定の刃の光るあり垣の内

兵十郎

先ず剪定の音に気づいたのでしょう。覗いてみると確かに人が動いている。そして手元に刃物の光が見えた。そういう時間経過として鑑賞いたしました。

・白壁に我が影法師暖かし

安廣

モノトーンの世界です。しかもフォーカスが合っていない、ぼーっとした自分自身の影。春の到来を思わせるすてきな取り合わせです。

・剪定の切り口白く尖りたり

安廣

剪定の仕事ぶりやその仕上りを詠む句は数多ありますが、この句ではぐーっと近づいて見えています。白さに

加えて「尖り」に気づくところが素晴らしい。

・春の闇犬の首輪の光りけり

遊子

夜の庭。じやらりと鎖の音がして、犬小屋を見ると：ということなのでしょう。しかし昨今犬は殆ど室内飼いです。明るい部屋の中にいます。ひよつとして昔飼っていた犬への思いが見せた「光」なのか。春の闇はいろいろ想像させてくれます。

## 暁子 選

剪定の鋏の音や日は高し

真理

帰宅後に庭でうろうろ暖かし

茉衣

目刺焼くうつろな眼一列に

輝子

◎初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

奥能登は神楽大蛇の春の闇

盛雄

◎給食の大鍋干され暖かし

幹三

剪定を終へて明日は湯治とか

輝子

単調な剪定の音静寂打つ

茉衣

◎干されても土佐の荒波恋ふ目刺

和江

春の闇心の闇にかぶさりぬ

真知子

春の闇もののけたちの足音す

真理

剪定の梯子の妻を仰ぐなり  
春の闇太宰をりさう情人と

乱 乱

干からびし目刺に我の少し似て

安廣

◎卒寿過ぎ変はらぬ暮らし暖かし

言成

カンテキに海の色無きめざし焼く

かな子

海の色波の音残して目刺

輝子

息殺し何かが潜む春の闇

幹三

剪定は庭師に任せ俺散髪

瑛三

地震あれど戦なき国目刺焼く

翠

眼ならず口刺されしも目刺かな

太美子

春の闇雨降る夜はなほ深し

安廣

◎剪定の音のみ寺の塀高し

兵十郎

春の闇呼びとめられて身の竦む

輝子

## 暁子 特選句講評

・初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

虚子の「初蝶来何色と問ふ黄と答ふ」という有名な句

を意識して、「初蝶来」を避けられたのかもしれない。

それとも黄色を強調されたかったのかもしれない。中七

下五素敵な句です。

・給食の大鍋干され暖かし

幹三

低学年の子ども達が下校する頃、給食室では後片づけの最中。洗った大鍋を干すと春の日差しが鍋に当たって反射する。もうすぐ春休みだ。

・干されても土佐の荒波恋ふ目刺

和江

認知症になって何もかも忘れてしまった人でも、生まれ故郷のことは覚えておられるそう。魚も人も故郷に対する思いは同じだ。

・卒寿過ぎ変はらぬ暮らし暖かし

言成

八十を過ぎると日々、出来なくなることが増えてくる。同じ程度の暮らしを維持することは本当に大変です。それが九十過ぎても保たれているというのは、頭の下がる思いだ。今年も無事に寒い季節を乗り越えられた作者の安堵の気持ちが表示されている。

・剪定の音のみ寺の塀高し

兵十郎

静かな道を歩いていると剪定の小気味よい音が聞こえてくる。気がつけば丁度寺の塀にさしかかっている。大寺だろうか。作者はその音に中の様子を想像しておられる。

互選三句

朱美 選

客と座し語る縁側暖かし

邦夫

芳しき香に足止める春の闇

恵子

門限に帰らぬ子待つ春の闇

かな子

息子三人年頃には幾夜もそんな事があつたな。

瑛三 選

あたたかや金魚いささか太り気味

和江

暖かやみどり児抱きて親となる

輝子

大仏の胎内にある春の闇

幹三

着想面白い。案外心で泣いておられるかも。

和江 選

暖かくうらうらの日に友送る

茉衣

樹々の氣息もうるほふて春の闇

太美子

帰宅後に庭でうろうろ暖かし

茉衣

仕事終へ気持ちもほつと、物の芽も庭のあちこちに。

かな子 選

干からびし目刺に我の少し似て

安廣

幸薄し目刺になるを一期とす

乱

あほやなあしやあないなあと暖かし

幹三

上2句は自嘲か達観か。私はしやあないなあが好き。

邦夫 選

暖かや日を背に波止の太公望

瑛三

夫の遺句例句に見つけ暖かし

太美子

暖かさ手のひらに受くお薄かな

恵子

春の茶会で客が茶碗を手にした時のほっこり感。

恵子 選

ポケットの中でつなぐ手あたたかし

輝子

暖かやつまづきし身を支へられ

暁子

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

乱

奥様への溢れるやさしい気持ちを感しました。

言成 選

ポケットの中でつなぐ手あたたかし

輝子

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

幹三

朧月光たたえし銀の髪

真理

妻の白髪を目立たせる月光を讃える心理も年の功か。

堯子 選

一椀の今昔を継ぐ暖かさ

恵子

暖かや今日の一会を拾ふ旅

兵十郎

春の闇に土の香満てる雨の宵

安廣

春の闇に漂う花の香でなく土の香を詠まれた事が新鮮。

太美子 選

暖かや心の角の丸くなる

暁子

雨温し木々の芽も吾も背伸びする

翠

はるばると山国に來し目刺かな

暁子

季語の目刺がよく効いて、妙に納得させられる。

輝子 選

初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

原種なれば花まろきままチューリップ

兵十郎

父ふむといつもの皿に目刺二尾

和江

いつもは主菜を盛る皿に、目刺が二尾。はてな？

兵十郎 選

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

幹三

リズムよき剪定の音向ひより

暁子

暖かや心の角の丸くなる

暁子

心の角も丸くなるような暖かさとは人の情であろうか。

茉衣 選

春の闇前ゆく人を吸ひ込めり

暁子

春の闇犬の首輪の光りけり

遊子

銭湯へ続く夜道の暖かし

真理

夜銭湯に行くのが寒い日々だったのに暖かくなって幸せ。

眞知子 選

春闇に我も溶け行く雨の夜

安廣

犬居らぬ犬小屋にある春の闇

幹三

やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子

それまでとは違う柔らかく湿った闇がいかにも春。

真理 選

やはらかきものを踏みたる春の闇

暁子

給食の大鍋干され暖かし

幹三

暖かや座して本読む磨硝子

かな子

磨硝子の暖かな眩しさが目に浮かびます。

翠 選

剪定の翁鼻歌ブギウギと

恵子

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

乱

原種なれば花まろきままチューリップ

兵十郎

原種の花の特徴まろきままの音が心地よい。

盛雄 選

客と座し語る縁側暖かし

邦夫

どこまでも歩いて行きたい暖かさ

朱美

隧道の春闇の筒出でにけり

幹三

トンネルの春闇の筒の表現が詩的で素敵である。

安廣 選

身を任す暖かな日にしどけなく

乱

門限に帰らぬ子待つ春の闇

かな子

暖かやみどり児抱きて親となる

輝子

親となつた喜びを子どもの暖かさを介して見事に表現。

遊子 選

暖かや足裏にある耳のつぼ

幹三

剪定は庭師に任せ俺散髪

瑛三

暖かや今日の一会を拾ふ旅

兵十郎

思わぬ出会いのある旅の季節になつた高揚感の伝わる句。

乱 選

暖かさ手のひらに受くお薄かな

恵子

はるばると山国に來し目刺かな

暁子

暖かき土手に寝転び手を翳す

邦夫

眩しいほどの暖かさを土手に享受する喜びを詠った。

参加者自選句

どこまでも歩いて行きたい暖かさ

朱美

暖かや日を背に波止の太公望

瑛三

父ふむといつもの皿に目刺二尾

和江

暖かや座して本読む磨硝子

かな子

暖かき土手に寝転び手を翳す

邦夫

剪定の翁鼻歌ブギウギと

恵子

花落とす躑躅の中に春の闇

言成

田起こしをじつと見ている鴉かな

堯子

初蝶黄しあはせ庭に撒くやうに

太美子

暖かやみどり児抱きて親となる

輝子

暖かや今日の一会を拾ふ旅

兵十郎

単調な剪定の音静寂打つ

茉衣

止んだかと覗けばうるむ春の闇

眞知子

春の闇もののけたちの足音す

真理

春闇に身を置き人生省みる

翠

田楽や囲炉裏阿蘇路の芳しさ

盛雄

春闇に我も溶け行く雨の夜

安廣

寒明けの水の濁りや鯉動く

遊子

剪定の梯子の妻を仰ぐなり

乱

## 即吟

### ―卓上の

「あらせいとう（ストック）」  
「原種チューリップ」 「目刺」を詠む―

目刺見る真剣な目の句友たち 暁子

切花のストック句座に句ひたる 邦夫

のぞきこむ原種とかいうチューリップ 恵子

チューリップ原種をいかに改良す 堯子

青の濃き生命残せる目刺焼く 輝子

句座統べてあらせいとうの七重八重 兵十郎

あらせいとう色さまさまに乱舞せり 茉衣

生前はうるめいわしといふ目刺 幹三

原種とぞ句座の灰色チューリップ 翠

色とりどり句座賑はすあらせいとう 安廣

安廣さんが句会にもってきくださったチューリップの原種は、我が家のテーブルの上で昼は開き、夜は閉じています。中は白い花びらの下半分が黄色で花芯も黄色です。

暁子

## ひとこと

山田安廣

普段出席される方が、お二人風邪の為欠席投句となりました。インフルエンザやコロナが流行しております上、気候の変わり目です。皆さま健康には十分お気を付けて下さい。

会報編集を然るべきタイミングで、待兼山俳句会内部で出来る体制を作ろうと、色々検討して参りましたが、どうしても体制が整わない為、久次米様のご厚意で当面は外注を続ける事となりました。また、私どもの財政を考慮下さり、従来の半額で受託して頂ける事となりました。

また、例会で出席の皆様方にお諮りした結果、待兼山俳句会合同句集の第5集を来春を目途に発行することになりました。詳細は追ってお知らせ申し上げます。

幹三さんより「季語は末尾に置く方が生きる事が多い」との示唆がありました。